

航跡

岸壁にとまる1羽の鳥は
潮に乗って運河を上る魚を狙う

ぼんやりとした姿を浮かべて
停泊している貨物船を迎えに
タグボートは、ゆるやかな航跡を残す

午前の光はまるで
海面から立ち昇る水蒸気のように充満し
大気と水面との境界を判然とさせず
全ては同じ粒子でできているかに見える

ゆっくりとそぞろ歩く人々は
自らの想いまでもそこへと溶かし
もはや存在さえ無意味と為す

(その時、鳥はふいと羽ばたき上がり
海面の一点へとすばやく舞い下り
音も立てずに魚をとらえる)

タグボートの航跡は
さっきまでリボンだったものが
今は、川かと思われるほどに広がっている

いずれはそれも消えゆくものか
それとも、永遠にさざなみとして
残るものか
在り続けるものか

(1999.12.30)